

第374運用支援中隊 滑走路閉鎖で迅速な代替着陸を遂行 *374 OSS responds to runway closure with rapid contingency landings*

April 15, 2025

By Staff Sgt. Spencer Tobler
374th Airlift Wing Public Affairs

4月8日、第374運用支援中隊と第36空輸中隊の隊員は、このほど承認されたばかりの代替着陸帯にC-130を迅速に着陸させた。

第374運用支援中隊の管制官は、横田に向かっていた航空機の緊急通報を受け、一本の滑走路を一時的に閉鎖した。

その通報が入ったのは、4機のC-130Jスーパーハーキュリーズが近隣の定期飛行訓練を終えて基地へ帰還する時だった。C-130が上空で待機するか代替のF誘導路に着陸するか、乗員と管制官は判断を迫られた。

燃料の残量や訓練の機会といったことを踏まえると、その決断は明確だった。

第374運用支援中隊司令スコット・ブランコ中佐は「新たに承認された着陸帯を、実際に運用する機会だと確信した。今日、我々のC-130が離着陸できる離着陸帯を迅速に整えられることを証明した」と述べた。

第374運用支援中隊には、着陸帯安全担当官(LZSO)という専門のグループがあり、主の滑走路が使用不能となった場合に代替滑走路を設け、運用する役割を担っている。LZSOは、着陸帯の安全確認、整備、管制官との調整を行う訓練を受けている。

ブランコ中佐は「LZSOプログラムは、同中隊で始めたもので、今では太平洋空軍全体で取り入れられている。滑走路のある基地であろうと有事の場であろうと、どこにでも展開し、着陸帯を設営し、運用できることを我々は証明している」と語った。

滑走路閉鎖の報せ受け、LZSOプログラムのディレクターはすぐにLZSOの有資格者を招集し、誘導路に必要な機材を集め、迅速に着陸帯の準備に取りかかった。

第374運用支援中隊の上級監視管理官およびLZSOでもあるガブリエル・ガルシア軍曹は「現場を計測したり、異物を除去したり、航空機の翼が安全に通れるかなどの確認を行った。準備完了後には、通信周波数を調整し、航空機に対して安全確認の情報を伝えた」と述べた。

F誘導路は、今回の運用の6日前、4月2日に、太平洋空軍から代替着陸帯として正式に承認されたばかりだった。第36空輸中隊と第374運用支援中隊はこの機会を最大限に活かし、F誘導路からC-130の離陸も行った。緊急時や滑走路が制限される状況下での有効性を改めて示した。

ガルシア軍曹は「この能力は、今後の運用に極めて重要だ。滑走路が使えない状況でも、航空機の運用を継続できる柔軟性が示された。着陸できる長さの距離があれば、どこへでも部隊を展開できる」と言う。

LZSOプログラムは、緊急時においても任務の継続を可能にし、西太平洋における重要なロジスティックの拠点としての柔軟性と滑走路のレジリエンスの向上に寄与している。

